

「間」の魅力

時間と空間を内包する建築

指導教員 吉松秀樹 教授 印

3BEB3225 中野 諒八

・問題提起 鳥居の「間」

鳥居は神社の玄関口のような存在で、人々はその下をくぐりケガレを落とすと言われている。そこにはモノとモノの間という「間」ではない何かを感じた。そこには曖昧な境界や、日本人の精神的要因が関わっているのではないか。

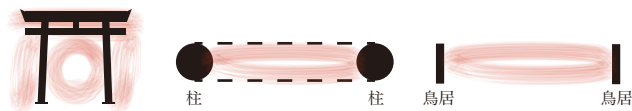


fig.1 鳥居に見られる「間」

・調査 日本独特の概念「間」

「間」とは日本独特の概念だ。英語ではspace、timeに似ているが同じ意味の単語はない。単にモノとモノの間だけではなくそこには時間や環境人も内包している。海外では時間と空間に相違があるが、日本ではそれらを混合して認識し今の日本の環境、生活、芸術において認識の基本となっている。元々は空間を認識する時に自然を分節したことから始まり、自然観や宇宙観が大きく影響している。そのため日本の至る所で「間」が存在する。

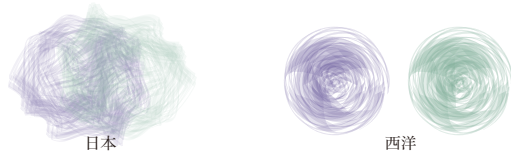


fig.2 時間・空間の認識イメージ

・分析 「間」のある建築

「間」が顕著に表れている建築の例から考察する。厳島神社は柱で間を。どこでも外の景色が望める。妙喜庵待庵は開口の開け方で間を。採光や視線の操作がなされている。旧猪俣邸では縁側で間を。内と外が入り混じる。このように、各建築全体ではなく部位によって「間」を作っていることがわかった。



fig.3 「間」のある建築

・分析 「間」のアイデア

柱によって「間」を作る。柱の間隔、高さ、配置する位置で変化をさせる。開口の開け方で「間」を作る。縁側のような中間領域で「間」を作る。これらの他に潰す、並べる、取り除く、貫通させるなどの「間」を作るアイデアがある。

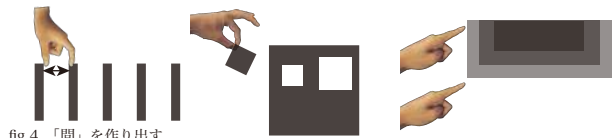


fig.4 「間」を作り出す

・提案 「間」で建築を

時間と空間を内包させる「間」を分析で行ったアイデアで建築にする。

開口のずらしにより人の視線が変化し、空間のつながりを意識させる。開口を断面で考え、その高さや厚みで人の動作、視線の交差を発生させる。

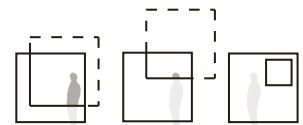


fig.5 開口による「間」



fig.6 壁による「間」

・今後の展望 「間」の応用

「間」の概念をさらに深く理解した上で応用していく提案を考える。「間」の無い都市を選定し建築する。人と人の関係性が薄くなった都市に交流施設を建て地域促進を進める。

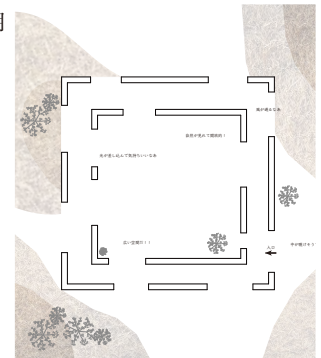


fig.7 平面図

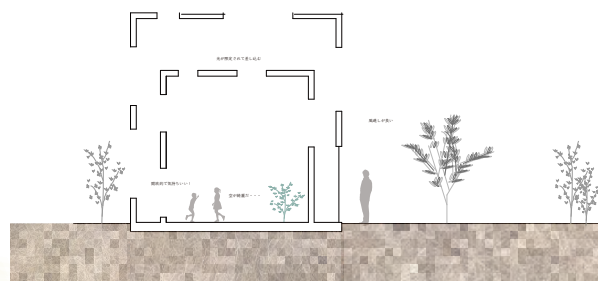


fig.8 断面図